

白雲守端における「眼横鼻直」について

岩 村 康 夫

白雲守端禪師（一〇二五—七二）は、彼が最初に住持した江州承天禪院の開堂の日、人々が眼横鼻直にし去ること、これが仏祖出世垂手の本懷である、大解脫海中に於て強いて見性成仏を説いた祖師西來の本意も此の事に因る、と言明した。

…從上の諸聖、皆火焰裏に向て來りて垂手するは、只だ一切の人の眼横鼻直にし去ることを要するのみ。…此の事は、上、諸仏の分上に在つても、曾て一毫も増さず、下、一切含生の分上に在つても、曾て一毫も減らさず。只だ一念迷妄を為し、覺に背き塵に合し、三途を輪転し暫くも休息すること無し、遂に我が竺乾の本師を勞し、大解脫海中に於て強いて玄波を湧し、三乗の教の外に人心を直指して見性成仏せしむ。…

『白雲守端禪師広録』卷一（Z二・二五・二百d）

眼横鼻直にし去ることが此の事であり、此の事のあるがままが大解脫海であり、此の事を覺るのが見性成仏である故に、眼横鼻直は禪の要諦を示していると言ひ得るのである。

此の事とは、教外別伝の不立文字底であり、直指人心底で

あり、見性成仏する以外決して理解できない事を指している。しかし、迷忘に在つても不足せず、自覺しても増加しない事である故に、それは、眼横鼻直にし去る事と異ならない。人々は、迷つても眼横鼻直であり、悟つても眼横鼻直である故である。従つて、眼横鼻直とは、人々に具足している本来の面目を指している。と言える。

次の舒州興化禪院の開堂法語は、眼横鼻直が本来の面目であることを証明している。

（二）祖心不可得、達磨安心の因縁を拏て言う、…意は大患と爲り、理は大障と爲る。直に意理掃尽することを得れば、豁然として便ち是れ本郷なり、山僧に頌有りて云く、終始心を覓むるに得可き無し、寥々として少林に人を見ず、滿庭の旧雪重ねて冷なることを知り、鼻孔依前として上唇に搭る。正当怎麼の時、乾坤大地、都て是れ箇の解脫門なり。…

（二〇九c）

この法語では、直に意理掃尽した處、そこがそのまま本郷である、と説いている。即ち、一念不生の處で本地の風光が

開示されるのである。その風光を守端禪師は、雪はやはり冷たく、鼻は依然として口の上に在ったと頌し、乾坤大地が一箇の解脱門であると説いている。無心に徹した処で自覚されるのは眼横鼻直であり、眼横鼻直の時、乾坤大地の全てが一箇の解脱門となり、一切が解脱の相を現成していることを知るのである。白雲守端の法孫圖悟克勤が「現成公案。一糸毫も隔えず、普天匝地、是れ一箇の解脱門なり」（T 57・七六九a）と説いたのと轍を一にしている。現成公案とは、解脱（仏法における公の案件）が既に達成され、現に円成している意である故に、眼横鼻直は現成公案と同義である。

次の舒州法華山証道禪院の開堂法語では、各々に円成している眼横鼻直を正法眼蔵と名付けている。

諸人分上、各々自ら正法眼蔵有り、毎日起き来り、是を是とし非を非とし、南を分ち北を分つ種々の施為、尽く是れ正法眼蔵の光影なり。此の眼開く時、乾坤大地、日月星辰、森羅万象、只だ面前に在りて、毫釐の相有るを見ず。此の眼未だ開かざる時、尽く諸人の眼睛裏に在り。…。

（二〇九 a）

正法眼を開くと、乾坤大地日月星辰森羅万象が面前に在るにも拘らず、毛の先程もその相を見ない。一切が有って無いということは、逆に見れば、物事は無くて有る故、元の在るがままである。正法眼が開かなくとも、是非を分別し、一切の物事を見ることができ、全く不便はない。正法眼の開と未

開とでは、見性成仏を説く立場では隔たりがあるが、乾坤大地が一箇の解脱門である見方では全く相違が無い。守端禪師が「大聖人の道は、有言に在らず無言に在らず、有言に聞らず無言に聞らず。只だ者箇、赫然として独耀す」（二〇九 c）と言うように、禅は、有無を超絶して歴然として有る者箇を直指するのである。

次の上堂語では、その者箇を一宝として問うている。

上堂して云く、乾坤の内、宇宙の間、中に一宝有りて形山に秘在す。大衆、眼は鼻の上に在り、脚は肚の下に在る。且く道え、宝は甚処に在るや。乃ち云く、人面は何処に去るかを知らず、桃花は旧に依て春風に笑く。

（二〇二 a）

形山に秘在する一宝は、乾坤宇宙として顕現し、眼が鼻の上に在り、脚が肚の下に在る形山として現成している。見ている者は、己れ自身を見ることはできない。見る者は見られている事において現成している。即ち、諸法において一宝が現前するのである。人面（見聞覚知している者）が何処に在るかとは知らぬ（無我無心）時、旧に依て（以前より）桃花が春風に咲いていること（諸法実相）に気付くのである。意理掃尽して本郷に在ることを悟るのと異ならない。ここで注目すべきは、前に雪が冷たいことを重ねて知り、依前として鼻孔が唇の上に在ると頌し、ここでも桃の花が旧に依て春風に咲くと述べ、重ねて・依前として・旧に依てという語である。こ

れは即ち、乾坤が一箇の解脱門である上に、元より解脱していたのを自覚することを表している。仏祖は、眼横鼻直の者に眼横鼻直であることを悟らせようと、全く余計なお節介をしているのである。

次の堂上語では、そのような事情が明示されている。

開先に到り上堂して云く、古人道く、旧時の路を行くこと莫れ、本来の衣を掛くこと莫れと。如今人有りて、鋒刃上に向て身を横たえ、火焰裏に手を出すも、尽く是れ勞して功無し、豈に更に水を担て河頭に向て売る可けんや。然も是の如しと雖ども、若し姆母をして明鏡に臨ましめば、也た道わん、紅粉を施くことを勞せずと。

(二〇一c)

旧時の路や本来の衣(仏道や菩提)を自覚した者は、己れ一人で悟りに酔ってはならない。危険を犯しても、仏道を行じ仏法を説くべきである。若し、人々が耳を貸さず、その努力が徒勞になり、その上更に、川岸で水を売り歩く(解脱門中で解脱を説く)ような愚かな行為と物笑いになったとしても、母親が化粧する間を惜しんで子供を育てるように、無駄を恐れず無功用の慈悲を行すべきである。

次の堂上語では、仏祖の行願の日常性を説いている。

上堂して云く、釈迦老子に四弘誓願有り。煩惱無辺誓願断。法門無辺誓願学。衆生無辺誓願度、無上菩提誓願成。法華も亦た四弘誓願有り。飢え来れば飯を喫せんと要し、寒到れば即ち衣を添

白雲守端における「眼横鼻直」について(岩村)

え、困ずる時は脚を伸ばして睡り、熱処では風の吹くことを要す。

(二〇六b)

空腹になれば食事を取り、寒ければ暖を取り、疲れたならば休息し、暑ければ涼をとる。全く無事安閑たる日常底である。若しこの願いが成就し、問うべき事は何も無く、求むべき事は何も無い無事安閑とした日常を過ごすことができれば、誰もが大安楽の境地になるであろう。そのような境地で見れば、全ての物事があるがままで肯定され、現実が一箇の解脱門となり、一切が実相を露呈するのである。即ち、眼横鼻直は眼横鼻直のままて解脱の相を現成するのである。

このような大安楽の境地は、容易な修行で到るとは思えない。しかし、圓悟が「見成公案、触処円成。問いを立て答えて立て、語に涉り言に渉るや無事に事を生じ、平地上に波瀾を起すのみ」(T47・七五1c)と言うように、仏を求めず法を問わず、只だ無事で過ごせば成就するのである。故に、眼横鼻直を無心の処で覚ったように、眼横鼻直にし去るには無事に過ごせばよいのである。従って、《無事》こそ白雲禅の眼目である、と言わねばならない。

〈キーワード〉 眼横鼻直、無事、見性成仏

(正眼短期大学講師)